

夏芙蓉

作
越
智
優

蓮見先生

由利

サエ

舞子

千鶴

キャスト

千鶴 (激しく) 待って！ まだ行っちゃだめ！
由利 …ちーちゃん？
千鶴 もうちよつとだけここにいて。だって、約束したじゃない。

間

舞子 …約束？
サエ えっ、泣いてんの？ マジで？
由利 ちーちゃん大丈夫？
舞子 ちー、約束って？
千鶴 …ううん、いい。わかった。ごめん、もうすぐでみんな離れ離れになっちゃうから、ちよつとウルって来ちゃいました。
何それ。
千鶴 ごめん。
サエ わけわかんないよ。
千鶴 ごめんね、ほんと。でも、なんか、寂しくて。
サエ まあ、長い付き合いだもんね。いつ頃からだ？ アタシは小二の時転校してきたから…。
由利 私はちーちゃんと舞子ちゃんが遊んでるところにいられてもらった。
サエ じゃあ、最初は舞子と千鶴か。
舞子 (何か考えていた) え、あ、うん。
由利 (千鶴に) どうやって知り合ったの？
千鶴 …舞子ちゃんは覚えてる？
舞子 えっ？ ああ、どうだっけ…。何しろ40年くらい前の話だし…。

千鶴 忘れちゃった？

舞子 いや…。覚えてるよ小学校の…入学式の日、帰るとき。

千鶴 そう。

舞子 雨が降ってて。へへへへ

千鶴 私、お母さんが迎えに来るはずだったけど、なかなか来なくて、後で分かったんだけど

舞子 仕事で遅くなってる。私、傘持ってたなくて、校門のところまで困ってる。

千鶴 アタシの傘に半分入れたげて、それで帰った。

舞子 全然知らない子なのに。

千鶴 そういう性格だから。

舞子 で、舞子ちゃんの前で別れるときに、普通だったら傘貸してくれるけど、

千鶴 舞子ちゃん、「じゃあね。」って、そのまま行っちゃったんだよ。

舞子 だって、あんた途中で転んでビショビショだったじゃん。水たまりで。

千鶴 どうせ濡れてんだからいいか、って思ったんだよ。

舞子 (笑って) ひどい。

千鶴 そういう性格だからさ。

舞子 それがきっかけで私たち仲良くなって。それからタマちゃんとサエちゃんとも仲良くなって。

千鶴 ああ、そうなんだ。

サエ 覚えてる？ 中学入ってサエちゃんが剣道始めて、私、よく試合見に行ったの。

千鶴 覚えているよ。なんでだかわかんないけど、千鶴が見に来ると決まって

サエ アタシ負けちゃって。よく八つ当たりしたよね。

千鶴 「千鶴はもう見にくくなー！」って。

サエ 今考えるとアタシが悪いよね、千鶴、関係ないのに。

千鶴 (笑って) 結構悲しかった。

サエ 子どもだったから。

千鶴 この定時制入ってからも、いろんなことあったね。

由利 そうそう、私ら中卒4人組だったからちーが皆で高校行き直そうって。
40過ぎから、定時制！

サエ (笑う)

二人 舞子ちゃん、いっつも遅刻してたね。

舞子 だって予備校に息子迎えに行かなきゃでき。
典型的過保護。

サエ うるさい！

舞子 だって、いっつもだったよ。

由利 千鶴が出席簿書き直してくんなかったら、本気でヤバかったよね。

サエ えっ、そうなんだ？

舞子 え、うん。

千鶴 ホラ、千鶴出席簿返しにいく係だったじゃん、蓮見先生に。

サエ だからそんなときにコッソリ。ね？

舞子 ……そうだったんだ。全然知らなかったよ、千鶴、サンキューね。

千鶴 (笑って首を振る)

サエ まあ、そんなぐらいいないと進級ヤバイ、ってぐらい遅刻してたもんね。

舞子 遅刻ってあんま続くとダメなんでしょ？ 欠席と同じぐらい。

サエ そうなんだ？

由利 たぶん。

舞子 私成績は良くなかったけど、遅刻はしたことはないよ。

由利 「良くなかった」？ あんた「良くなかった。」ってレベルじゃないでしょ？

由利
む。

舞子
毎日毎日、居残り勉強に付き合わされてさー、アタシ、自分の苦手な教科の勉強も満足にできなかったもん。

サエ
もしうちに帰ってても、してなかったでしょ？ あう

舞子
：まあ、そうだけど、あう

由利
あの時はちーちゃんにお世話になりました。本当に。(ぺこり)

千鶴
どういたしまして。(ぺこり)

舞子
だからアタシもいてやったでしょ？

サエ
つか、どつちかというと邪魔してた気がする。

舞子
ええー。(不満)

由利
そうだよー。舞子ちゃんいつもウソの答えばかり教えてさー。

舞子
そんなことしてないよ。

由利
したよー。

舞子
してないしてない。

サエ
した。アタシ知っているもん。あんた、タマイに「ミトコンドリアって何？」って聞かれて、なんて答えた？

舞子
ミートコンソメドリア。

サエ
大嘘じゃない。

舞子
だって：その方がおもしろいかなって。

サエ
だからおもしろいおもしろくないの問題じゃないのよ。だいたい何よ、ミートコンソメドリアって、

舞子
あれですか？人間の身体の中にドリアが入っているわけ？

サエ
細胞のなかに。いっぱい。気持ち悪いよ、そんなの。

舞子
でもまさか本当に信じて授業中に答えるとは思わなかったんだよ！

サエ
蓮見先生、十分ぐらい笑い転げてたでしょ。

由利
でも最後の方は泣いてたよ。

サエ 泣きもするよ、そりゃあ。

舞子 でもその後アタシ廊下立たされたんだよ。マジで。だからアタシやカツオ君じゃない、つつの。

千鶴 もうあんなことも出来ないのね。

舞子 えっ？

サエ ……まあ、卒業しちやええね。

千鶴 もう会えないね、舞子ちゃんとも、みんなとも。

舞子 ……だからさ、ちよつと大袈裟じゃない？ 千鶴。

確かに家族に無理言つて通わせてもらつてたから、しばらくはおとなしくしてなきやいけないけどさ。

あんとアタシなんて、電車で一時間だよ？ あ、アレか？ 卒業しちやつたんで、

ちよつとメリーなんかになつてゐるわけか？

(千鶴に) メランコリーのことを云いたいらしいよ。

ちーちゃん、私たち、卒業してもずつと一緒だよ。

そうそう、大事にすべきは友だちと「五つの袋」ってことさ。

(泣き笑い)

あれ、おかしかったね。

ホント、卒業式なんてね、寒いし、長いし、あの後もなんか偉い人がずつとしゃべつてさ。

「旅立ちの日に」歌つたね。

むちやくちや練習させられたよね。「白い糸の中心」

それで、終つたら終わつたで、アタシら、会場片付けなきやだつたでしょ？

え？

何？

…四年生なのに？

え？

舞子

サエ

舞子

由利

舞子

サエ

由利

舞子

サエ

千鶴

舞子

由利

サエ

舞子

千鶴

サエ

舞子

千鶴

舞子

サエ

由利 舞子

え、片付けてた？
え、だって、ホラ：卒業式が終つて、みんな出て行つて。でもアタシたちは、残つてて、机とか片付けてたでしょ。：会場係だったから。

間

千鶴

結構かかったんだよね、夕方まで。

舞子

そうだよ。ちーと一諸に、机を職員室まではこんでいって。

千鶴

すごい重くて。

舞子

渡り廊下のところで一回降ろして、ひと休みしたら、窓の外に：。

千鶴

夏芙蓉。

舞子

夏芙蓉の花が：。

千鶴

：。

舞子

咲いてて、それで：。(無理に明るく) あ、そっか！ 違うよ、そりゃ去年だ。

サエ

ハハハ、うわ、アタシ、大丈夫か？ それは去年だ：。だから袋の話も去年で：。

舞子

でも：。

由利

(止めて) だから、それは違くて。今年は、アレだ、ホラ：ねえ。

舞子

(座布団を抱きしめる) 舞子ちゃん、なんか、わたし怖い。

舞子

今年は、今年の卒業式は：朝、起きて：ううん？

舞子、千鶴を見る。

舞子

：起きた？

千鶴 舞子ちゃん…、
舞子 覚えてないのはなんで？
千鶴 …。
舞子 卒業式の前は？ アタシなりにしてた？

間

サエ …シャツ。
舞子 えっ？
サエ そのシャツ。
千鶴 …。
舞子 …あ、そうだ。このシャツ。みんなで買いに行った、タマイの息子さんの車で。
千鶴 二月に。
舞子 そう。
千鶴 楽しかったね。
舞子 …楽しかった。すごい。アタシ、すごいはしゃいでて、これ（シャツ）すごい
気に入ったから。みんなにはヘンだとか云われてたけど。
千鶴 （笑って）だってヘンなんかもん。
舞子 だから、買ってすぐにソツコーでトイレで着替えて、帰りもずっとこれ着てたんだ。
由利 舞子ちゃん…。
舞子 タマイの息子さんが運転していて、タマイが助手席にいて。アタシがその後ろで、隣に千鶴とサエがいた。
千鶴 うん。
舞子 みんなすごい盛り上がってて、年甲斐もなく騒ぎまくってて、音楽とかかけてたのも

千鶴

全然聞こえないくらいうるさくって…。

うん。

舞子

ちーがハムスターの話してさ。

千鶴

うん。

舞子

アタシもさ、もうすぐ卒業だし、いい年だからこんな風にみんなでバカ騒ぎするのも最後になるかもしれない、とかこっそり思ってた。

千鶴

うん。

舞子

タマイの息子さん「運転できないから静かにしてください。」とか云って。でもアタシらバカだから全然騒いで、それから…。

サエ

事故にあった。

由利、泣き出す。サエ、由利の肩を抱く。

サエ

ぶつかったとき、凄い音がして、体が前の方に叩きつけられて…。(笑って)

舞子

…血が、ついてたんだ。このシャツに。すごいっばい。(由利の方を向く) … あんたの血がついてて。

間

舞子

ちー、アタシたち、死んでいる。

蓮見 末次さん？（少し大きく）末次さん。

~~千鶴はゆくりと目を覚ます。~~

蓮見 末次さん？

千鶴 すいません。勝手に入り込んで。

蓮見 それはいいんだけど。急にメールなんかくれて、どうしたんですか？

千鶴 なんかわかしくて。学校なくなっちゃう前にもう一度見ておきたくて……。

蓮見 そう……。

千鶴 蓮見先生にも会いたかったし。ああ

蓮見 どう？ 上手くやっています？ メールにはなかなか上手く行かないって書いてあったけど。

千鶴 ……先生はどちらに行かれるんですか？

蓮見 まだわからない。辞令が降りるのは三月になってからなんですよ。

千鶴 ……校舎も取り壊されちゃうんですか？

蓮見 どうもそのようです。統廃合で使わなくなった校舎を再利用する例も多いんですけど、

千鶴 ここは最初からある計画があつて、そのための廃校だったみたい。

千鶴 ある計画ってなんですか？

蓮見 オリンピック。選手村を作るらしいんです。

千鶴 そうなんですか……？

蓮見 末次さん、卒業して何年になります。

千鶴 12年です。

蓮見 もうそんなになる！？

千鶴 今年が13回忌ですから。

蓮見 そうか。私がおここに赴任してきた年だものね。
千鶴 その節は大変お世話になりました。

千鶴、自分のバックから三本の黒い筒のようなものを取り出す。

蓮見 (千鶴の机の上を見て) 何？

千鶴 卒業証書です。

蓮見 卒業証書？

千鶴 卒業証書って、文房具屋さん置いてないんですね。

蓮見 三人の？

千鶴 はい。でも卒業証書って売ってないから、これホントはただの賞状なんです。

でも、これ(黒い筒)は売ってました。へんなの。(笑う)

問

千鶴 …先生。

蓮見 なに？

千鶴 あのと、車が右に曲がるところで、見えたんです。

蓮見 …。

千鶴 …車がぶつかって、すごい衝撃で。私すぐに気を失って、でも舞子ちゃんの声が聞こえたんです。

蓮見 「ちー、ちー」って私のこと呼ぶ声が。

蓮見 …。

千鶴 それで、舞子ちゃんに手、引っ張ってもらって車から出ようしたんだけど、

私、なんかうわああって、自分の体抱き締めて、そうでないと内臓とか飛び出していっちゃいそうだった。その時に初めて、「ああ、私事故にあったんだ」って思ったんです。

蓮見

千鶴

病院で検査を受けてうちに帰って、布団に入って一人になると、急に体が震えだして、なんか恐くて恐くてたまらなくなって。しばらくしたら舞子ちゃんから電話がかかってきて、その時、サエちゃんとタマちゃんが即死だったこと知りました。

蓮見

千鶴

舞子ちゃん「なんか頭痛い。それに吐き気がする」って云って。それでうちの人に救急車呼んでもらって、病院に行っただけですけど。そのまま……。

蓮見

千鶴

人は死ぬんだって、あらためて思いました。

千鶴、涙を拭う。

千鶴、卒業証書の筒を持って三人の机の方に。

千鶴、一つ目の筒を、由利の机に置く。

蓮見

人は死ぬ。間違はなく、どんな偉い人でも、お金持ちでも、有名人でも絶対に死が訪れる。だからこそ精一杯生きて行かなければならないのよね。人は大切なことをすぐ忘れてしまう。毎朝、同じように目を覚ますこと、生きていて、ってそれだけでありがたいことなのよ。亡くなったひとたちの分も頑張らなくちゃね。去年、夫が亡くなったんです。

千鶴

千鶴、二つ目の卒業証書を、サエの机に置く。

千鶴 子供もいないし、何のために生きているのか分からなくなるんです。

千鶴、最後の卒業証書を、舞子の机に置く。

蓮見 何のために生きているのか？誰かのために生きているのか？いい暮らしをするため？

人から認めてもらうため？人に自慢するために生きているのか？

どれでもいいと思います。何でもいいと思います。明日あれ食べようそれでも十分だと思います。ちなみに私はモンスター・ペアレンツの萩原さんをいつか、ひっぱたいてやろうと思っています。

(笑う)

蓮見 (机の上の花束を見て) きれいですねえ、なんていう花？

千鶴 夏芙蓉。春に咲いて、夏に枯れます。校門のわきの垣根に毎年咲いてた。

蓮見 ああ、…。

間

千鶴 学校がなくなっちゃう前に卒業式をやっておきたかったんです。

蓮見先生に送って貰いたかったんです。

千鶴、卒業式の時に歌う歌を口ずさむ (歌) 旅立ちの日に

蓮見 卒業おめでとう。あなた方は先生が受け持った生徒の中でもとびっきりの生徒でした。

これからみなさんは又、元の生活に戻っているんな事にぶつかるでしょう。

辛いこともあるかも知れない。でも、この学校で学んだこと、この学校で過ごした思い出、

千鶴

そして何十年も培ってきた友情だけは決して忘れないでください。先生、ありがとうございます。これで私もいろんなものから卒業できたような気がします。明日から胸を張って生きていきます。

蓮見

そうですね。私も何か晴れやかな気分です。

千鶴

ありがとうございます。

音楽。

蓮見、出ていく。

開きっぱなしになった扉から、舞子が入って来る。

千鶴

舞子、自分の机の上の卒業証書に気付き、それを取り上げる。
舞子たちが何か喋っている。

しかしその声は、観客にも、千鶴にも聞こえない。

「ちー、これ……」

?

(これ、卒業証書?)

?

(…アタシらの分もあつたんだ?)

千鶴

!

サエ

千鶴

由利

千鶴

舞子

カーテン

舞子、卒業証書を筒から取り出す。

由利 (ちーちゃん、これ賞状じゃん)

千鶴 えっ?

舞子 (あ、あんた、これ自分で書いたでしょ?)

サエ (バレバレ)

千鶴 何? 舞子ちゃん?

舞子 (だって、ここんとはみ出してるもん。あんた工作とか下手だったもんねえ)

千鶴 ごめん、聞こえない。

舞子 (ハハハ、でも嬉しいよ)

千鶴 舞子ちゃん、聞こえないよ。

舞子 (ねえ、これでさ)

千鶴 舞子ちゃん!

舞子 ちー、アタシたち…。

千鶴 えっ?

三人 一諸に卒業した!

見つめ合う二人。

千鶴泣いている。

舞子は笑っている。

— 幕 —